

第六章 大陸の経営

昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件に始まった支那事変は、日本政府（第一次近衛内閣）の不拡大方針にもかわらず、ずるずると拡大し、戦局は中国全土にひろがった。広大な中国領土を占領した日本は、あちこちで占領行政上の問題に直面していた。昭和十三年初頭から、軍部を中心に対支政策二元化のための対支中央機関設置論が起こったが、外務省は、軍部が占領地支配ばかりでなく、対支外交の権限をも握ろうとするものであるとしてこれに強く反対し、宇垣一成外相の辞任問題などを惹き起こした。紛糾を重ね、揉みに揉んだ結果、この機関は興亜院と命名され、外交を除く対支政策の樹立、執行、在支特殊会社の監督および各省の中国関係行政の統一保持などを管掌することとなり、昭和十三年十二月十六日に「興亜院制」が公布された。総裁には首相が、副総裁には外務、陸軍、海軍、大蔵の四相があたり、実質的な責任をとる総務長官の初代は柳川平助陸軍中将であった。

大平は、二度目の妊娠中の妻と長男正樹を妻の実家（東京牛込区若宮町三十一番地）に残し、昭和十四年六月十五日に東京駅を発つて、単身任地にむかった。前述の商大同期の長尾頼隆はその頃、門司鉄道管理局に勤めていたが、大平を下関で出迎え、山陽ホテルで食事を共にした。「大平さんは何か淋しいことを言っていました」ということである。

関釜連絡船で釜山に着き、京城に一泊、平壤、奉天、北京を経て、張家口についたのは六月二十日の夕刻である。

「張家口は、一口で言えば、土の都であった。木というものは殆んど見られない土一色の田舎街であった。日本旅館に装を解いたが、えらいところに来たものだ。大蔵次官の甘言に騙されたようなものだ」と思つて、はるばる朔北の地に来たことを怨めしく思つた。それに水が乏しく、且つその水も硬度が二、三十度とい礦水のようなもので、折角もつて行

つたりプトンの紅茶も、全く味が違ってしまう始末で、腹をこわすことが多かったのには困った。」「(『財政つれづれ草』)

しかも、張家口の蒙疆連絡部は、他の興亜院の連絡部よりはるかに複雑な政治環境の中に置かれていた。当時、張家口には駐蒙軍司令部が置かれ、蓮沼蕃中将(のち大将)が率いるこの駐蒙軍の支配下に、昭和十二年九月、まず察南自治政府が創設され、ついで軍は大同に入城してここに晋北自治政府ができ、十一月には張家口に蒙疆連合委員会が成立して、蒙疆全域の国づくり業務が本格的に開始されていた。この間、蒙疆地方の行政指導はすべて関東軍と満州国政府によって行われた。

日本政府は関東軍と満州国政府のやり方を行きすぎと感じ、しばらくは蒙疆を華北の一部とみなして、すべての行政処理を果たそうとしていたが、現地では、蒙疆は満州の一部と考えられていた。そういうところへ東京から興亜院というえたいの知れぬ日本の役所の官僚が入ってきたわけである。現地の日本人が、軍を含めて、これら新参官僚を白眼視したのは無理もなかった。

大平赴任後の九月には、それまでの蒙疆連合委員会が発展的に解消して、蒙古、察南、晋北各政府が合同、蒙古連合自治政府が成立し、蒙古人の徳王がその主席となった。

「内蒙古全体の人口構成は、七、八百万人といわれるが、大部分は漢人で、蒙古人はわずかに二、三十万人にすぎなかった。その自治政府の主席に、蒙古人の徳王を据えたこと自体が、いかにも不自然であった。」「(『私の履歴書』)

十月に商工省からこの蒙疆連絡部に出向赴任してきて、一年間大平と机を並べて仕事をした遠藤六郎(のち拓殖大学教授)は、次のように記している。

「当時の興亜院蒙疆連絡部の幹部職員、つまり高等官職員は僅か八名であった。経済課長が小野寺昌一陸軍主計中佐(転出後、大平が課長)、同課には大平正芳事務官が居り、新しく赴任した私も鉱工班担当技師として同課に配属された。ほかには庶務班担当の山本兼久少佐、会計担当の重田一彦理事官、財務課担当の中沢久範書記官、同課所属の山下秀義、藤野事務官である。」

私の着任した翌日、歓迎の宴が長官酒井中將によって催され、高等官職員全員が出席した。張家口では一流の料亭の一つ、寨校閣においてであった。この席で私は大平さんから実にいい話を聞いた。彼はいう。

「まず、興亜院連絡部の置かれた立場、実態をよく眺めてから仕事にかかることですよ。私なんぞ、大蔵次官直接命令での来任でしたが、次官はいうんですよ。君はいうなれば内蒙の大蔵大臣なんだ、白紙に絵を書くように、君自身の才覚でも出来るんだというんです。ところがどうです。現実には蒙古連合自治政府が、この地域の行政指導事務に当っており、その上に駐蒙軍がどっかと坐っている。蒙古政府のやり口を批判し、修正を強いれば、直ぐに軍に訴え、軍が圧力をかけてくる。酒井長官も軍との摩擦を極力警戒しています。とも角、現地の三つの機関のありようをよく見極め、うまい具合に泳いでいくことですよ。」

強気で赴任した彼も、当初は余程苦慮したのである。彼のそつした話を私は有難く聞いた。

大平自身は、「いきおい毎日の勤務も楽しかろつはずはなく、私は懐々として楽しまない毎日を送っていた。」(『私の履歴書』)と書いている。

だが、大平は、そういう環境の中にあつても、持ち前のなばり強さと努力とで、このわだかまりの糸を丹念にほぐし、連絡部の業務を少しずつ軌道に乗せて行つた。

遠藤はつづけている。

「……一介の地質技師に過ぎなかつた私は、事務官僚としての彼が、駐蒙軍司令部、蒙古連合自治政府、興亜院東京本院、隣接の華北連絡部の間を、あるときは強硬に、あるときは柔軟に取り持つて、成果を挙げていく絶妙の力量に、強い感激をつけたものだった。彼は一橋、私は東京と大学は違つし、卒業年次は確か彼の方が四、五年後輩であり、年も二つ三つ私より若かつたが、てきぱきとしたその事務処理能力、上司に対しては諄々と所信を説き尽して自説を曲げずに筋を通すなばり強さには、ほとほと感じ入つたものである。正に彼は、幼にして大成した観があつた。」

蒙疆の経済政策の中で重視されたのは、対支投資計画と物動計画であつた。この地方でこの対象となるのは日蒙合併で

設立された竜烟鉄鉱株式会社や大同炭鉱株式会社であったが、大平の記すところによれば、「この両会社の監督をめぐっての諒解事項などは、こつした内蒙の奇型的な性格を反映して随分おかしなところがあったし、その役員人事などは、東京と新京との板挟みになって、どうしてもすっきり決めることができなかった。」(『財政つれづれ草』)

この二つの会社は内地の同種の生産会社に比べて遙かに大きな生産を示していたが、これら会社の生産拡充用の設備機械、消費資材の割当ては、すべてその年の「物資動員計画」(略称 物動、昭和十三年一月発足)に照らして連絡部で取りまとめ、東京の興亜院本院と折衝査定し、企画院の裁定を受けねばならなかった。大平事務官は、それらの諸会社の事業内容を精密に分析して、計画を立て、興亜院本院や企画院に持ちこんだ。

この時、興亜院本院経済局経済二課に、海軍中佐の浜田祐生がいた。遠藤六郎によれば、「関東軍の行き過ぎをことのほか憎む浜田さんは、坊主憎けりや袈裟まで憎んで、関東軍の困づくりで生まれた蒙古連合自治政府の要求にはきわめて冷たく、厳しい査定を下す人だった。しかし、筋の通った理非曲直を弁えた大平説明には、浜田さんもことごとく参って、蒙疆連絡部査定済の物動計画、投資計画は、原案通りで認めてくれ、大いなる大平ファンとなった。」

昭和十四年(一九三九年)の十月十七日、大平の家には二男裕が生まれたが、大平は浜田に、「浜田さんの名前を一字もらいましたから悪しからず」と言った。ただし、浜田の名は祐生であって、裕生ではない。

それはともかく、こつした大平の努力の甲斐があって、軍や現地政府も、「物動」や「投資」という線に乗った仕事は興亜院蒙疆連絡部を通さなければならぬし、また筋を通すなら東京でがんばってくれろということがわかって、次第に大平事務官のところへ頭を下げるようになった。大平は、そのあたりを仕事の手始めとして、蒙疆経済の運営を手がけて行く。

調査をしてみて、まずわかったのは、蒙疆地方が、砂漠と遊牧民、そして地下資源という一般に抱かれているイメージとはちがって、農業地帯だということである。同地方の住民の大半が漢民族であることはすでに述べたが、この人々の多くは、明代末期の大飢饉のさいに中国本土から八達嶺を越えて流れこんできたものの子孫であり、彼らが砂漠を耕作地帯

に変えていたのだった。農作物は、小麦、その他の雑穀、ケシ等である。したがって、この地方の経済を論ずる場合、農業を主とした構造を考えなければならぬのに、日本人は、東京ではもちろん、現地においても、そうした理解を持っていなかった。さらに、蒙疆地方は、満州において日本が面を確保しているのちがって、点と線しか支配していなかった。ところが、「現地の実情を知らぬ東京は、杓子定規な低物価政策の原則を固持して譲らなかつた。その結果は、日本側の掌握している物やサービス、例えば石炭、塩、鉄道運賃、電気や電信の料金だけに低物価政策が実行され、現地人の経済圏には、一向に浸透しなかつた。……そのため、現地から購入する農産物の類は、おしなべて高くついた。」(『私の履歴書』)そこで大平は、現地の日本語新聞『蒙疆新聞』に「蒙疆経済を裸にする」という論文を掲載して、啓蒙活動を行った。また、『朝日新聞』や『毎日新聞』の「大陸版」にも、同様の視角から対蒙政策を論じた。

前出の同僚遠藤六郎は、この頃、大平がこれら新聞の記者たちを引き具して、市内の『日本カフェ』などで盃をあげながら、盛んに蒙疆経済の実態について弁舌を振っていた光景を記憶している。

占領地の不正常な形態であるとはいえ、蒙古連合自治政府は、一応は政府であつて、中央銀行券も独自のものが流通し、治安はもとより、財政、経済、物価、為替などについてもほぼ独立した運営が行われていた。日本や中国大陸各地との取引も「貿易」のかたちであり、日本には石炭と鉄を、上海や天津にはケシからつくつた阿片を輸出し、その金で必要な品物を輸入するという具合であつた。

それだけに、『白紙に絵を書く』ことはできなかったものの、「張家口での約一年半の滞在は、素朴ながら国家の『原型』というようなものを勉強するには、またとないよい機会を与えてくれたものだった。」(同前)

当時、華北連絡部にいた前出の大学同期の岡本貞良は、この頃の大平の視野が大きく広がっていたことを示唆するような証言をしている。

「大平さんは、東京出張の行き帰りに、必ず北京の華北連絡部に寄るわけで、その時、数人集まって状況報告をやるんだ

けれども、われわれは、大平さんの報告が実に完熟していることに驚いたという記憶があります。ひと味ちがうところではなく、事務官離れした、次元の違つところから物を把え、判断して、ディスプレイするといふふうだった」。

この頃、大平の直接の部下だった人々は、彼をどのように見ていたのだろうか。

昭和十四年四月に関東軍測量隊を除隊して、大平が着任する前から経済課に勤務していた宮城英太郎は次のように語っている。

「大平さんは軍が嫌いだったと思いますね。しかし、『物動』との関係で軍との交渉は多かったので、大平さんは、私たちを行かせて、軍の話聞いてこさせました。そのおかげで、私たちは身分不相応な会議にも参加できたのですが、北京や上海などにもあまり行かず、電話で根まわした上、私たちに行かせました。一見無精のようでしたが、見るころはちゃんと見ていて大綱を握り、とくに大同炭鉱と竜烟鉄鉱はしっかりとつかんで、視察すると、二日ぐらいで報告書をつくって提出していました。

ある日、いつもの格好（机を背に足は窓に）で、読みかけの本を開いたまま、『おお、宮城君、FOB、CIFって知ってるか』とテストされましたが、何も知らなかったのです。大平さんから『それは貿易の基本だよ、勉強勉強』と諭されました。また、『一日に二十ページは本を読め』とも言われました。大平さんは本当に読んでいるのかなと思いましたが、便所から原書を持って出てきたのには驚きました」。

同じ年の十月、千葉県庁から転出してきた由比良一の回想は次のようである。

「私は、あとから来て、宮城先輩と一緒に大平経済課長の下に属したのですが、大平さんの最初の印象は、何か威張っていて、こちらが頭を下げているのにそっくりかえっているという感じでした。しかし、やがて、自分の配下のものの面倒をよく見る人だということがわかってきました。他の課員が経済課の課員を呼んで文句を言うと、その課長を呼びつけて『おれを通して言え』と文句をつけていました。他の課の若い連中は良くは思わなかったかもしれないが、経済課の連中は大平さんを全面的に信用するようになりました」。

この二人の話からすると、この頃の大平は、人に対するかなりの「好き嫌い」があったようである。とりわけ占領地のように、支配、被支配が明らかなるころでは、権力を笠に着た軍人が響きを買うような振舞いをする人が多いが、大平はそれに強い嫌悪の念を覚えた。しかし、「かようなことは軍人だけを買める訳にも行かない。権力の具体的表現である参謀肩章に跪坐して、事の軽重善悪をわきまえずに、軍人に追従し、或は逆にその権能を利用しようとする役人や民間人が、当の軍人に劣らない責任を負うべきであると思った。」（『財政つれづれ草』）と大平は書いており、軍、官、民のいずれにも、大平の腹に据えかねる人物がかなりいたであらうことも想像できる。

赴任して数カ月うちに、大平は、次第にこの地方を理解し、それにつれて、この地の風土や人情にも馴染んで行った。

張家口に所在する蒙古政府主席の徳王とは、日本政府駐蒙代表の幹部として時折宴席を共にすることがあったが、ある日、大平は徳王にその王府のある西ソニットという旗（村邑）に招待された。

「張家口から、スーパー五人乗りの小さい飛行機で、徳王さんに案内されて、その王府の客となり、羊や馬の乳で造ったお酒をご馳走になった。徳王さんと御令息が出て、随分歓待してくれたが、私は始めて、徳王さんが、酒豪であることを発見した。というのは、張家口での宴会では、徳王さんは、殆んど僅かしか酒を飲まなかったからである。按ずるに、少数民族の王着として絶えず生命の危険を肌身に感じさせられているので、自宅以外での深酒を慎んでいるのだと事情通は話していたが、少数民族にはわれわれが理解できない苦労があるものだと思った。」（同前）

また、内蒙古深く、蒙古人地帯の戸口調査に出かけたこともあった。

「トラックで果しない高原を二、三時間位の行程を行くと、小さい村落に辿りつく。途中狼がトラックを追かけて来ることもあった。」

村落に辿りつくと、車を捨てて一戸一戸包を訪れ、家族の状況や財産の状況（羊が何頭、牛が何頭、馬が何頭等という

風に)を調べるのであった。夜が来れば、テントを張って寝ることもあれば、蒙古人の包の賣客バヤとなることもあった。ラマ廟を訪ねては生仏に会ったり、その祭事を見物したりもした。そして九日間草原地帯を歩いたが、十一月というのに、もう極寒の寒さであった。そして一応調査を終えて、張北から張家口に帰ったのであるが、張家口の灯がチラチラ見えかけた時は、私はまるで東京の灯が見えたように懐かしくもあり嬉しくもあった。それからというものは、不思議にも、朔北の僻地だと思つた張家口が、私にとつては、一応文化の圈内にある街だと思われ、ここに勤務することを別に苦勞とも思わないようになったのである。」(同前)

かつて英国の宰相ディズレーリは「逆境に勝る教育なし」と述べたことがあるが、逆境や失望とたたかつて、自分の手でかちとつた自信は、順境にあつて仕事をして得た自信よりもはるかに強靱なものである。大蔵省の昭和十一年組の多くは、この時期に興亜院に転出となつたが、その任地は上海、青島、廈門など、「土の街」張家口よりもはるかに条件がよい都市で、一見、大平は貧乏くじをひいた形であつた。大平も、最初のうちは「大蔵次官の甘言に騙された」と感じ、また、軍の横暴もあつて「懐々として楽しまない日」を送つた。ただここで重要なのは、他の条件のいい都市の連絡部の課長は、昭和七年組、八年組などが占め、十一年組は課長補佐のポストしか得ることができなかったのに反し、彼だけが経済課長を命ぜられたことである。

彼は最悪の環境の中で、しかも全く新しい役所の新しい出先の仕事が生みだす問題を解決する責任を負わされた。税務署長や間税部長などのように、大蔵省の長い歴史や伝統によってルール化されている仕事ではなく、蒙疆における彼の仕事は先例のないものであり、それだけに創造性を要求されるものであつた。

このことは結果的に彼に幸いした。淋しげな顔をして関釜連絡船に乗つたときとちがつて、朔北の寒風は彼をたくましい行政官僚に成長させて行つたのである。

昭和十五年の夏もすぎ、任期の切れるのも間近になつたが、後任がなかなか見つからなかつた。一つには同僚の多くが戦争に取られて、役所の人員が減つたせいもあつたが、張家口という場所の評判を聞いて、みながおそれをなし、配屬を

断つたという事情もあつたらしい。大平が東京に出張したとき、秘書課長の山際正道に「どうしてくれるんですか」と質問したところ、山際は「自分であとがまを探せば帰してやる」と言った。そこで大平は入省一年後輩の佐藤一郎が企画院にいるのを思いだして、食事に誘つた。佐藤は次のように言う。

「銀座の資生堂でカレーライスをおこつてくれましてね、そこで口説かれちゃつたわけですよ。張翥が雁の足に文を結びつけて言伝てしたという話をしたり、班超の故事を引用したりしてね、お前にでも来てもらわなければ、おれは永久に朝北の地に骨を埋めなきゃならん」と言うわけです。私もちよつと文学青年的なところがありましたから、その場で「いよいよ」って二つ返事で応諾しちゃつたのです」。

こうした経緯もあつて、大平は、昭和十五年の十月、内閣から帰朝命令を受けた。蒙古から満州各地を旅行し、十月下旬、東京に帰つた。新しいポストは、興亜院本院の經濟部第二課である。興亜院官制によれば、第二課は「一、北支那開発株式会社並中支那振興株式会社ノ監督ニ関スル事務、二、在支企業ノ統制ニ関スル事務、三、支那ニ於ケル拓殖事業ニ関スル事務」となつていた。大平はその「一」の二つの投融资会社の監督の仕事を与えられる。

「日本の行政権は、日本の特殊法人たる北支開発、中支振興の二会社には及ぶが、現地法人たるその子会社には及ばなかつた。そこで、政府としては、この二大親会社が、子会社に投融资する場合の契約を紐として、子会社に対する事業上の個導と監督の手を間接的に伸ばしていたわけである。かような会社の数は鉱山、鉄道、港湾、運送、塩業、電気、電信電話、等数十に及んでいた。」（『財政つれづれ草』）

大平はすでに張家口にあつて、大同炭鉱や竜烟鉄鉱のような経営の分析や事業計画といった仕事を手がけてきたが、このように多岐な産業にまたがる多くの企業を監督するのは容易なことではなかつた。そこで彼は、高松高商時代にイエスの僕の会の仲間であり、東京商大の数期先輩で、横浜市立商業専門学校（のち横浜市立大学）で経営学を教えていた山城章に助力を頼んだ。

山城は言う。

「私は、大平さんが興亜院の事務官をしておられました時に、熱海の奥さんの実家の別荘に泊りこんで、一緒に原稿書きをしたこともありました。手伝ってくれて有難うというお礼からか、「いっぺん支那に行ったらどうか」と言われるんです。そこで興亜院の囑託という身分をいただきまして、神戸から上海へ行き、南京、北京、張家口と視察にまわったわけです。その頃の興亜院の権威というのはたいへんなもので、興亜院の囑託というだけで、船では将官なみの上座に坐られ、食堂でも最大級の待遇でした。

張家口に入ったとき、大平さんから電報がきまして、「帰ってこい、今でないとは帰ってこれなくなるよ」と一言つんです。昭和十六年の七月でしたが、ソ満国境の関東軍が移動しているときで、船も何もなし。そうしたら、大平さんの指示で、飛行機を一機出してくれました。それに乗って北京から日本へ帰ったのですが、大平さんは興亜院の中でもたいした実力者だなと思いました」。

蒙疆時代に、小さくとも一つの政府の経済の切盛りを経験してきた大平は、かなり自信もつけ、また強気にもなっていたのだろう。次のような話がある

当時、北支那開発の総裁は、第一次近衛内閣時代の蔵相、賀屋興宣だった。大きなことの好きだった賀屋総裁は、満鉄調査部のひそみにならない、北支那全域の大規模な資源調査を行うことを企画し、大調査局の設置をもくろんで、その予算案を提出してきた。大平がこの予算案にきびしい査定を加えたため、賀屋は激怒し、正面衝突となったが、結局、調査局誕生のときはかなり縮減された形となっていた。

大平はこれについて、「それにしても、私は若気のためとはいえ、随分向うみずなことをやったものである。そのとき、興亜院経済部の第一課長をしていた毛利英於氏は、私に対して「役人も飛行機と同様、離陸と着陸の瞬間が大事なんだ。君はいま、離陸しようとしているところなのだから、あまり上司にたてつくのは慎む方がよい」と親切に注意してくれた。」

『私の履歴書』と記した。

北支那開発や中支那振興は興亜院と同じく、基本的には日本の中国占領政策を推進する機関であった。しかし、大平は、

「……これらの会社の事業計画は、……民需の充足にもかなりの重点をおいていた。又長期に亘って、支那経済の基盤の充実やその経済力の発展に寄与したいという素直な構想を併せ持っていたことは事実だ。」(『財政つれづれ草』)と書き、塘沽の港湾建設の実例を挙げている。

ここで強調しておきたいのは、大平がこの張家口滞在一年半をふくめた興亜院在勤の三年間を通じて、きわめて中国の实情に詳しい人間になっていったということである。彼は、中国の経済や社会、風土や国民性などに直接触れると同時に、中国の産業について資源から製品まで広範な分野の問題を考えなければならぬ立場にあった。すなわち、大陸を経営する官僚群の一員だったのである。その大平が、結局は「敗戦」という破産宣言を受けた日本の大陸経営ぶりをどう考えていたかは興味あるところである。

彼は、日本の事業が中国経済の基盤の充実やその経済力発展に寄与した面もあり、また日本人は英国人やフランス人に比して、はるかに「自己本位ではなかった」としながらも、戦争の終わった八年後に、「対支政策の企画や立案が、全体として、近視的であったことも付言しておかねばなるまい。それは漢民族に対する民族政策でなければならなかったのに、日本人の独り相撲の悔みがなかったとはいえない。又世界の大視野から、米英やソ連の思惑や期待も十分勘定に入れておかなければならなかった筈だ。この点については、わずかに外務省が若干の抵抗を試みたとは言うものの、その主張は、強さと勇気を欠いた憾みがあったといえよう。

大東亜戦争の先駆となった支那事変の処理は、結局、第二次世界大戦に吸収され埋没されてしまつて、その功罪を、分離して論ずることができなかったが、その底を流れる基調そのものは、大東亜戦争における失敗の要因と軌を一にしたものであったと思う。それにしても、対支政策はわれわれ国民にとって、高い授業料ではあったが、又貴い民族的試練であったことは否めまい。」(『財政つれづれ草』)と書いたのである。

大平のこの中国問題観が、後年の彼の日中国交回復の努力にどう反映していたかはわからないが、彼が三十数年後に中国を旅し、中国を見、中国人と言葉を交わしたときに、この当時の中国の姿がしばしば脳裡にひらめいたと想像してよい

だらう。

興亜院には、財務部、經濟部、文化部、技術部があつたが、各部の課長以下の職員はそれぞれの専門に応じて、陸海軍はもとより各省から派遣されていた。陸軍と海軍は極端に仲が悪く縄張り争いに明け暮れ、各省からの出向者はそのとばつちりを食つて困らされたことも多かつたが、ここに集まつた各省出向者は、総じて出身母体の利害にこだわることなく協力の実をあげた。

当時、国鉄から出向して経済第三課にいた磯崎勲（のち国鉄総裁）は次のように語っている。

「いまの国立劇場が位置する三宅坂と半蔵門の間の隼町にあつた興亜院は、対支政策の現状をどうするかだけでなく、戦後の支那経営を考えていましたから、氣宇壮大な役所で、真面目で緻密な計画を立てる戦争遂行機関の企画院とはまるきり雰囲氣がちがっていました。

しょつちゅう支那の地図をみながら、ここで鉄をつくる、ここで農業をやるといふように漠たる東亜経営を考えていたので、日本の役所としては異例だつたと思います。ですから、集めた人物もどちらかと言えば堅気でない、少し調子はずれの人が多かつた」。

そういう寄合い所帯の中から、若手事務官九人による 九賢会 という集りがつくられた。メンバーは大平のほか、大蔵省の大槻義公（のち日本専売公社副総裁）、宮川新一郎（前出）、若槻克彦（前出）、満鉄の佐々木義武（のち通商産業大臣）、通産省の村田恒（のちジェットロ理事長）、鹿子木昇（のちアジア研究所長）、農林省の伊東正義（のち外務大臣）、鉄道省の磯崎勲（前出）らである。この 九賢会 にはこのほか当時課長であつた大蔵省の愛知揆一（のち大蔵大臣、故人）と通産省の小野儀七郎（故人）が客員として参加した。

磯崎は、「竹林の七賢人と比べると二人多いが、飲食歓娛の友であり遊山釣魚の交わりであるから、お世辞にも君子の交遊とはいえない。」と『日本経済新聞』の「交遊抄」に書いている。

故郷も大学も、そして所屬する官庁もちがうメンバーのこの集りが、大平の行政官としての視野を拡げるのに大きく役

立つたことは疑いない。またこの時の友人たちの中から、後年の政治的盟友も生まれることとなった。

だが、これらの人々が抱いた東亜経営の夢は、昭和十六年十二月八日の太平洋戦争の勃発とその後の推移によって、全く烏有に帰すこととなる。

大平が開戦をむかえたのは、横浜の三溪園の隣にある二階建てのわが家（中区本牧三ノ谷二百六十八番地）であった。彼は、蒙疆から帰ってきたとき、妻の実家の近くに家を借りていたが、税務署長の頃に住んでいた横浜が懐かしく、間もなくこの地に自宅を構えて、妻と長男正樹、二男裕と一家四人で住み、そこから興亜院へ通勤していたのである。このときの隣組に、大平のほかには二人の如水会員（東京商大卒業生）がいた。一人は保険会社勤めの深町徳三（故人）、もう一人は統計学者森田優三（のち一橋大学教授）である。学校づとめで、比較的自由な時間が多かったため隣組の組長をやっていた森田は、その頃の思い出を書いている。

「……開戦間もない昭和十七年の元旦の夜、私の家で三人（大平、深町、森田）が集まって正月を祝っていたら、身重だった家内が急に産気づいて、お二人に大へん世話になったので、この時のことは忘れない。短い間ではあったが、大平氏一家とは家族ぐるみのお付き合いで、……長男の正樹氏は私の長男より少し年下であったが、始終遊びにみえていた。『坊や何がおすぎ』ときいたら、『おイモとおミチヨ』という返事だったのが、わが家の一つ話になっていた。』（『シルバー・レポート』昭和五十五年七月二十日号）

大平夫人志げ子も、十二月三十日、長女芳子を出産した。戸籍上は翌年一月二日生まれとして届けた。

開戦の翌年、昭和十七年の七月二十日、大平は興亜院二年半のつとめを終えて大蔵省に戻ることになった。